

佐倉市直弥の宝金剛寺石造物調査について

蕨 由 美

はじめに

佐倉市直弥の宝金剛寺は、建仁三年（一一〇三）將軍源頼家が、北条時政に命じて創建させたと伝えられ、後に、岩富城主に封じられた北条氏勝（一五五九〜一六一一）が大檀那として支えた真言宗豊山派の古刹である。境内には、歴代住職の墓塔や、氏勝四百年遠忌に建てられた現代の五輪塔のほか、「直弥念仏」の隆盛を語る大きな念仏塔や、女性たちの秩父巡拝塔など興味深い石塔がある。

これらの石造物について、宝金剛寺住職の京極勇剛師から調査の提案があり、房総石造文化財研究会と八千代市郷土歴史研究会の会員に呼びかけて、江戸時代から現代までの石造物二十組三十一基の悉皆調査を行った。

期間は二〇一七年十二月より二〇一九年五月まで、調査参加者は、筆者と京極師のほか、当会の早川正司会長・

田中征志会員・川名芳一会員、八千代市郷土歴史研究会の村田一男顧問・畠山隆会員・菅野貞男会員である。

特にNo. 1の念仏塔の採拓と翻刻、解説は早川会長のご尽力に拠る。（注1 以下同様）

調査記録は、調査カード（宝金剛寺に進呈予定）に清書したほか、一覧表に銘文等をまとめて、文末に添付した。

なお、境内墓地の石塔については、昭和五十八年の石田肇氏の調査（2）と、平成十五年の松田富美子氏の調査（3）があり、特に正保〜明暦期の砂岩製五輪塔を含む歴代住職の墓塔群については、後者により詳細な報告がされているので、今回の調査対象としなかった。

また先行調査として、千葉県による一九九二年の調査（4）があり、一覧表の備考欄にその情報を付した。

一 江戸時代の石造物

1 概要

江戸時代の石造物は十二基で、前期に念仏塔一基と六地藏塔六基、後期に普門品読誦塔一基と秩父巡拝供養塔二基、出羽三山などの巡拝供養と墓碑を兼ねた石塔二基の建立があり、中期を欠く。

現在、六地藏は墓地入り口、その他は、明治期の石塔三基とともに、平成の堂宇建設に伴って移動され、本堂左側に基壇を設けて一列に設置されている。(5)

2 結衆する村人たちⅡ寛文十二年銘の念仏塔

総高二二四cmの安山岩製の笠付角柱型の石塔(一覽表No.1以下同様)で、塔身の高さは一二四cm。二段の台石に載り、上段の台石には反花が施されている。

塔身正面には、「アーンク」「ア」「キャ・カ・ラ・バ・ア」の梵字、その下に蓮座、「結衆敬白」の銘が葉研彫りで刻まれ、さらに右に「和田村寶金剛寺念佛結衆百余人」が「大菩提」を願い「逆修」(生前供養)を受けて建立したと、左には「寛文拾二壬子 曆二月吉日」



(一六七二)の年銘、そして導師は「亮賢法印」が務め、本願は「相月嚴誓」であったことが記されている。左側面には「ア」、右側面には「アク」の梵字の下に、それぞれ約十一行十八段にわたって人名が細かく刻まれている。裏面には、「アン」「バン・ハラ・ドボウ」の梵字がある。

四面の梵字の構成と意味は、正面の胎藏界大日如来種子「アーンク」、その下の「ア」と左右裏各面上部の「アー・アン・アク」の四種字は胎藏界の四仏をあらわす。正面「キャ・カ・ラ・バ・ア」は五大の発心門、裏面の「バン・ハラ・ドボウ」は塔婆の裏に書かれる梵字で、バンは金剛界大日如来であり、アーンクを合わせて金胎両部不二の思想を表現している。またハラは随求菩薩(觀音系)、ドボウは滅悪菩薩(地藏系)をあらわすという。

左右側面の人名については、拓本を採っても判読は極めて困難で、最終的に早川会長の助力を得て人数と半数ほどの名前を確定することができた。人名総数は三九五名。「道」や「妙」などに一字を加えた戒名と、「エ門」「お・・」「・・母」など俗名が、男女の差なく交じり合い、額縁の枠外にまで彫られている。戒名については、正面に記された「念佛結衆百余人」の人数から推測すると、その多くは故人の被供養者名と考えられる。

また正面本文の「和田村」のほか「八木村」や「天部(天辺)村」など近隣の村名もみられる。なお、和田村の村名は、延宝六年(一六七八)六月までで、同年秋からは「直弥」に改められたという。(6)

寛文十二年銘のこの石塔は、宝金剛寺境内では、墓石

を除き最古である。佐倉市内で同時期の念仏塔としては、大蛇町明神社前に大日如来浮彫像塔があるが、宝金剛寺の念仏塔は、優れた梵字の配置や彫り、人名を含む銘文の情報などから、千葉県内における江戸前期の貴重な石塔といえよう。

3 男女念仏結衆による貞享四年銘の六地藏塔

地藏菩薩の像を六体並べて祀った六地藏像は、仏教の六道輪廻の思想に基づき、六道のそれぞれを六種の地藏が救うとする説から生まれたもので、墓地の入口や参道入り口に祀られることが多い。

宝金剛寺墓地入り口の六地藏塔(No.2)は、合掌のほか幢・香炉・数珠・宝珠・錫杖と宝珠を持つ舟形向背型の地藏立像六体で、いずれも貞享四年(一六八七)の年銘と「男女敬白」の銘、「濟度」に続いて右から「天道」・「人道」・「修羅道」・「畜生道」・「餓鬼道」・「地獄道」の銘が入っている。台座には、「男女念仏」や「八木村」「米戸村」「直



弥村」「□風村」などの村名に続き、「石田」「椎名」などの名字や「法印□」など名前が彫られてあり、近隣の念仏結衆による建立と推察される。

4 普門品を十万遍唱えた供養塔

総高一四五cm、塔身の高さ九二cmの山伏角柱型の石塔(No.3)で、塔身正面に梵字「ア」とその下に「普門品洛又供養塔」、台石上段正面に大きく「讀經講中」の銘が記されている。

普門品(ふもんぼん)とは、觀世音菩薩の衆生救済を説く「法華經第二十五章 觀世音菩薩普門品」のこと、「洛又」はインドの命数法の一〇万の単位のこと、普門品を十万遍誦した供養塔である。

塔身右面には梵字「アク」と釈迦如来真言「ノウマク・サマ ندا・ボダナン・バク」、左面には「アー」と聖觀音真言「オン・アロリキヤ・ソワカ」、裏面に「アン」と「バン・ハラ・ドボウ」の梵字と「文化元甲子天(一八〇四)四月吉日」「導師皓月山法印盛傳」の銘があり、四面の一番上の梵字「ア・アク・アー・アン」は胎藏界四仏をあらわす。

台石下段の正面には、講の中心であったと推定される「直弥村 秋本平右エ門/馬渡村 内田甚右エ門/六崎村 峯道院/本町 宝幢院/上代村 斎藤勝右エ門/天部村 檜貝吉兵衛/米戸村 内田市右エ門」の五か村各代表者と二か村の寺院名が記されている。さらに台石上段の左・右・裏面には、二十二村六十五人の名が連記され、その内、戒名(道号)は四人、また女性は三人(う

ち二名は「・・母」の表記）である。

5 旅に出る女性たちⅡ天保と弘化の秩父巡拝塔

秩父巡拝塔が五基あり、うち二基は江戸時代の角柱型で、天保六年（一八三五）と弘化五年（一八四八）の銘がある。

天保の塔（No. 4）は、正面に大きく「観世音菩薩」、左側面には、「秩父同行三十二輩」、その下に「直弥村願主 利右エ門妻」と、同村他、寒風村・天邊村・宮本村・米戸村・上別所村の六か村、計三十一人の同行者数が記されている。各人の名前は記されていないが、代表者が女性であることから、同行者も女性と推定される。弘化の塔（No. 7）には、正面に梵字「キリーク」と「秩父三十四番供養塔」、三面の下部には「下勝田村重右エ門隠居」のほか「八木村嘉左エ門 母」「米戸村 市右エ門 母／源右エ門 母／直弥村 新七 母」など七か村計十六人の「母」たちが列記されている。

和田地区では文化十二年の直弥新田をはじめ、江戸後期から建てられる出羽三山供養塔からわかるように、各家の主な男性が、一生に一回は湯殿山など出羽三山登拝を果たす「奥州参り」を行うようになっていった。

そして、村の女性たちもまた、男性の出羽三山登拝に対応するように、秩父三十四観音霊場巡礼を行うようになる。（7）

宝金剛寺に残されたこれら巡拝塔は、子供たちを育て上げ、次世代に家を継がせた女性たちがこぞって巡礼旅に出るたくましい姿を物語っている。

6 巡拝供養と墓碑を兼ねた幕末の石塔二基

出羽三山や百観音などの霊場巡拝が信心業として盛んになった江戸後期、両親の菩提とともに、霊場名を記載しその供養を兼ねた大型の墓塔が、二基建てられている。

「寒風村 石田氏 富五郎」が建立した石塔（No. 5）は、総高一八二cm。天保三年に亡くなった母と天保九年に九十才で亡くなった父を供養する戒名と合わせて、右面に、出羽三山と四国霊場・西国・秩父・坂東の百観音を富五郎が行者として巡礼して奉ったと記されている。

「寒風村 椎名氏 繁右衛門」が建立した石塔（No. 6）は、弘化二年没の父と天保三年没の母を供養する戒名とともに、「湯殿山 月山 羽黒山」の銘が右側面に刻まれている。

両石塔ともに、幕末ごろに、家の墓として建立された墓塔と推測される。

二 近代（明治期）の石造物

1 概要

近代の石造物は四基あり、うち一基は講中一千余名によつて明治十二年に建立された「念仏供養塔」で、三基は明治十三〜三十一年に、女性たちが秩父三十四番などの霊場を巡拝した証の供養塔である。

その後の大正から昭和前半期の石造物はない。

2 「講中一千餘輩」建立の念仏供養塔

総高二七〇cm、二段の基壇と三段の台石上に、高さ一四四cmの角柱型の塔身を置く境内最大の石塔（No.8）である。

裏面の銘文で、願主は「當村（直弥村）岩井庄兵衛父岩井庄作」、宝金剛寺の三十三世盛範を導師として、「明治十二己卯（一八七八）四月廿四日」に、明治九年夏半ばから毎月二十四日に行っていた念仏講で近隣の同志を誘い約一千余人でこの碑を建てたことがわかる。

正面には、阿弥陀如来の種字「キリク」とその真言、右面に勢至菩薩の種字「サク」と四行の偈頌（仏の功德をほめたたえる詩）、左面に觀世音菩薩の種字「サ」と偈頌、裏面に「バン・ハラ・ドボウ」の梵字が彫られ、阿弥陀三尊の利益を祈願している。

この石塔で驚くべきは、台石三段に刻まれた約一千余人の氏名と町村名である。一部判読しがたい部分もあったが、全銘文の翻刻を試みたところ、六十六の町村名が



あり、総人数は一〇四六人であった。

町村名は佐倉市東部のほか、酒々井町・八街市・四街道市にも広がっており、そのうち四十人以上の村は城村・當（直弥）村・文違村、三十人以上の村は中沢村・鏑木村・土浮村・米戸村・勝田村で、石工は酒々井町上岩橋の小坂光造である。

宝金剛寺には、明治九年の念仏講中の「月次念仏仲間過去帳」他一冊と、多量の位牌札が詰まった「位牌箱」が残されていて、京極師によれば、その位牌札数は総数七八八枚（うち和田地区枚数一七五）、町村数六三、人名数七八三で、この石塔の約一千余人の名前とその地域との関連もうかがい知ることができるとのことである。

また、和田地区では平成二十六年まで、六座念仏の「直弥念仏」が直弥と天辺の檀家により行われていた。この念仏は月二回のうちの一回を宝金剛寺で、一回は各地区のお堂や寺で毎月八日に行われ、以前は、下勝田・上別所・八木・寒風・宮本の檀家も一緒に加わっていたという。（8）

3 盛んになる女性たちの秩父巡礼とその石塔

秩父霊場巡拝塔は、明治十三年（一八八〇）銘塔（No.9）と、明治十八年（一八八五）銘塔（No.10）に二つは共に角柱型で、後者は秩父霊場に加えて「善光寺如来」（阿弥陀如来）も参拝供養している。

台石にはともに「・エ門母」「・兵エ妻」の表記で女性名が記されている。村名については、十三年塔が

「天邊村 尾上村 墨村 馬橋村 柏木村 寒風村 直彌村」の十三人、十八年塔が「宮本村 米戸村 下勝田村 長熊村 酒々井町」の女性十四人と先達他男性三名で、村名は重複しない。

さらに明治三十一年（一八九八）には、優美な自然石を用いた秩父巡拝塔（No. 11）が建てられ、その正面には



「秩父三十四番観世音菩薩」、その下に「和田村大字八木区／先達 岡本市郎兵衛／同 すい」から「根郷村大字太田区／齋藤なみ」まで五地区十一人（うち男性は先達の一人）の村名と人名が連記されている。

村名については、明治二十二年（一八八九）の町村制施行に伴い、直弥・天辺・寒風・米戸・宮本などの十五村は「和田村」に、太田村などは「根郷村」に合併、昭和二十九年には、両村とも佐倉市と合併し佐倉市の大字

となっている。

人名の表記は、それまで「・妻」「・母」であった女性の名も氏名で表記されるようになった。（9）佐倉市とその周辺地域の女人講は、近世の十九夜講から近代では子安講へ、そして昭和期には秩父講へと変遷していく。

子安講を卒業した中年主婦の講である秩父講は、特に昭和三十年代以降交通の便もよくなって、地域の女性たちの親睦と観光を兼ねた巡礼旅行として盛んになり、現代もその記念碑としての石碑建立が多くみられる。

宝金剛寺の江戸後期から明治期の秩父巡拝塔五基はその先駆けであり、まだ交通も不便だったころ、広い地域から篤い信仰心で結ばれた限られた同志での旅であったであろう。

そしてこの明治三十一年塔が建てられた以降、秩父巡拝塔は、宮本・天辺・米戸・太田・八木・直弥新田などの地域ごとに建立されていくのである。（4）

三 現代の石造物

1 概要

今回の調査では大正期から昭和期後葉まで、調査対象とする石造物はなかった。

昭和期後葉では地藏像塔と「慰霊碑」。その他は、平成期の石造物で、平成二十年（二〇〇八）本堂再建に伴って奉納された石造物四組と、平成二十三年（二〇一一）

北条氏勝四百年遠忌の記念に整備された北条氏勝供養塔と記念碑である。

2 高速道路で殉職した従業員慰霊の地蔵像塔

本堂左奥の石塔群の右端にある白御影石の地蔵像塔（No.12）は、脇の角柱型の「慰霊碑」とセットで、昭和五十年（一九七五）ごろに建立された舟形向背の延命地蔵立像である。

宝金剛寺の脇を通る東関東自動車道は、昭和四十六年に新空港自動車道として一部開通した高速道路である。東関東自動車道の管理者であった株式会社京葉環境整備が、この道路で作業中に殉職した物故従業員の慰霊のため、本地蔵像を建立したとのことで、昭和期後葉の開発最中の時代をあらわす慰霊塔である。

3 本堂再建に伴って奉納された石造物

平成二十年に、本堂と庫裏が再建され、境内が整備されたことに伴って、参道入り口の六地藏塔、寺院名標柱、灯籠一对、賽銭箱が新たに奉納されている。

六地藏塔（No.13）は、総高二二一cm（塔身七五cm）の丸彫り像六体で、檀家十一名の奉納。台石には、右から金剛願地藏・金剛寶地藏・金剛悲地藏・金剛幢地藏・放光王地藏・預天賀地藏の銘札が付されている。この新しい六地藏設置以前は、天明年間と推定される古い時代の首のない六地藏が並んでいた。

標柱（No.14）は総高二四一cm。「佐倉市長藤和雄書」の「皓月山静覚院寶金剛寺」の銘。その上に三鱗の寺紋

がある。

本堂の前を荘厳する一对の石灯籠（No.15）は、総高三六五cmの堂々たる春日灯籠で、火袋に鹿と三笠山が浮き彫りされている。

賽銭箱（No.16）は大師堂に供えられた個人の奉納である。

4 北条氏勝四百年遠忌の記念碑と供養塔

本堂左手前に「寶金剛寺大壇主北条氏勝公／＼」静覚院殿恵公居士 菩提／没四〇〇年御恩忌記念／平成二十三年三月吉日／三十七世 勇剛代」銘の、高さ四十八cm平石型の記念碑（No.17）が建てられている。

篆額の「一顆明珠」は、裏面の銘によれば、「鎌倉市陽谷山 龍實寺」の「梅田良光」師の揮毫。曹洞宗の龍實寺は、玉繩城主四代の北条氏勝が先代供養に天正三年（一五七五）に建立した由緒ある寺院で、「一顆明珠」は一個の光る玉のような真理を道元禅師が「尽十方世界是一顆明珠」と『正法眼蔵』で著した言葉である。

さらに裏面には、「墓石復元協力 外山信司」ほか、玉繩桜植樹の団体名や境内整備協力者の名が刻まれている。この「墓石復元」とは本堂裏側墓地の奥に復元再建された新しい北条氏勝供養塔（No.18）のことである。

墓地には、北条氏勝の墓石の一部と伝承される銚子砂岩製五輪塔の水輪があるが、氏勝四百年遠忌に際し、総高一七九cmの御影石の五輪塔が新たに建立された。「キヤ・カ・ラ・バ・ア」の梵字と、「岩富城主北条氏勝公／静覚院殿恵公居士／平成二十三年三月吉日／三十七世 勇剛代」の銘が刻まれている。



この供養塔復元のモデルになったのは、成田市大慈恩寺の第六十代住職逆修の五輪塔で、総高二三五cmと大形で慶長九年（一六〇四）銘がある。本供養塔は大慈恩寺の塔を七〇％に縮小し相似形にデザインされたとのことである。

四 その他の石造物

1 六崎組十善講の大師像

平成二十年に新しく再建された大師堂内に、丸彫りの弘法大師石像（No.19）が安置されている。この大師堂は、佐倉市・四街道市・酒々井町にまたがる「六崎組十善講」の第八番の札所で、現在も巡拝が行われている。

六崎八十八か所霊場は、文政年間に六崎の鏡寶寺住職により四国八十八か所のミニチュア版として設置され、明治三十三年（一九〇〇）に同寺萩田師により組織化された（10）

この大師像は、右手で五鈷杵を左手で数珠を執る定型的な姿で、像の下に水瓶と木履が浮き彫りされ、総高七〇cmと高さがあり、他と比べて立派であるが、年銘はない。

六崎十善講成立時の「文政十二年」銘を有する大師像は吉見の万福寺境内裏の札所に三体あるが、宝金剛寺の像とは異なる像容である。また、飯重の成福院の札所の大師像と類似しているが、この像の年銘の確認や詳細な像容の観察もできず、したがって、宝金剛寺の像の造像年は不明である。



2 他寺院から移入された手洗石

墓地入り口の「明治十四年」（一八八一）銘の手洗石（No.20）は、平成二十年に八木区東福院境内より移転されたもので、「圓城寺治郎左衛門」の奉納者名が記されている。

現在、水栓も整備され清潔に利用されている。

おわりに

今回の調査では寛文十二年銘と明治十二年銘の二基の念仏塔の記録に大変苦労したが、前者は約四百人、後者には千余人の結縁者名があること、また真言や、偈、願文、造立の趣旨などの銘文も明らかになり、江戸初期と明治時代を代表する優れた念仏文字塔であることが判明した。

貞享四年銘の六地藏も像容がしっかりした江戸前期の貴重な石塔群である。六地藏は、江戸時代から数多く建立されたが、完形で残されているのはまれで、本寺の六地藏は佐倉市近辺でも最古級である。(4)

また、江戸後期と明治期にわたる五基の秩父巡拝塔は、現近代に佐倉市周辺で興隆する女人講の秩父巡拝活動を先行して物語る石塔群であった。

現代では、北条氏勝四百年遠忌に際して再建された氏勝供養塔が、学術的な時代考証により復元されたことが意義深い。

以上は、宝金剛寺の歴史を語るとともに、同寺を中心とした広い地域の信心深い人々の宗教活動をも示していると考えられる。

【出典・参考資料】

- 1 早川正司 『佐倉市直弥 宝金剛寺念仏塔 調査録』私家版 二〇一八
- 2 石田肇 『宝金剛寺調査報告書』公益信託佐倉街づくり文化振興白井基金による研究 一九八三
- 3 松田富美子 『宝金剛寺の五輪塔について』『佐倉市史研究』第一六号 佐倉市 二〇〇三
- 4 千葉県立中央博物館所蔵「石造文化財調査カード」京極勇剛 「お寺に伝わるたからもの『念仏石塔』」『蓮想』 二〇一九
- 6 宝金剛寺三十三世住職の盛範師が明治期にまとめた記録「村号 和田舊名 直弥ト号 改ル 延宝六戊午六月八和田号 十一月八直弥号 秋ト相見候月日未詳(以下略)」による
- 7 石田年子 「林立する女達の秩父巡拝塔」『日本の石仏』一五六号 日本石仏協会 二〇一五
- 8 和田ふるさと館歴史民俗資料室 「念仏」 佐倉市公式ホームページ
<http://www.city.sakura.lg.jp/000000115.html>
二〇一一
- 9 蕨由美 北総の女人講関連の石造物にみる女性名表記の変遷 『房総の石仏』第二七号 房総石造文化財研究会 二〇一八
- 10 村上昭彦 「六崎十善講―二冊の御詠歌帳について―」『佐倉市史研究』第三十号 佐倉市 二〇一七